

## 文化的鏡像の諸相—地理批評学/文学の研究 日本とヨーロッパ

ステファノ・コランジェロ

日本での最初の夜を大使館の部屋で過ごしたひとりのイタリア人旅行者が、朝食を運ぶ使用人にその朝天気はどうかと尋ねて、素晴らしいお日よりだと答えるのを耳にする。カーテンの向こうの外では、光が灰色で小糠雨が窓の上に、庭に、色鮮やかな金魚が群れる池に、二羽の大きく静かで荘重なほど真っ白なあひるの頭上にひろがっている。東京の空は乳白色にちかい薄い灰色をしていて、西洋の旅行者の目からすれば、そんなありふれた日よりをして素晴らしいとよぶには、かなり突飛な表現を必要とする。1980年秋のことだ。日本での滞在を始めて間もない作家ゴッフレード・パリーゼは、それから数ヶ月のあいだに、後に『雅は冷淡な』と題される物語風のルポルタージュを書くことになる。窓の向こうには、静かで冷たく動かない、まるで供物みみたいな美の国が、儀式性や内気、性質や身振りの奥深い特徴と切り離すことのできないあらゆる些細な強制やあいまいな形式の覆いの輪をともなって見える。一方で旅行者の背後には、メロドラマめいて文明化された曲芸集団の、強いられたかのような強烈な誇示の〈策略の国〉がある。

しかし今日、そのカーテンが開かれてから30年以上の月日を経て、その窓は鏡となった。イタリアが、日本の特徴を想像のなかで非常にゆっくりと冷静に積み重ねながら再び日本を眺めている。一方で日本はイタリアを、創造力がひらめく、得体の知れないサブカルチャーを経験したいささか着着きを欠いた不思議で危機的なヨーロッパの分派と見ている。東京外国語大学が昨年12月、ボローニャ大学プロディ講堂で、ボローニャ大学芸術学部と文哲学部イタリア学研究科の共催で、ドイツ、フランス、イタリアにおいてヨーロッパ交換プログラムに専念する若き研究者たちを、『文化的鏡像の諸相—地理-批評学/文学の考察 日本とヨーロッパ』と題した2日にわたる国際会議に集結させた。この会議には、イタリア語、フランス語、ドイツ語による研究報告と論評を携えた東洋学、政治理論、映画、パフォーマンス・アート、歴史、ヨーロッパと日本のイタリア学の研究者が招かれた。たとえ鏡像という言葉を選んだことが、両文化間の分析の反転可能性を言及することで不完全な反転可能性というものを直ちに正当化するとしても、やはり、ずっと先になってわかることだが、会議の副題のなかの「地理-批評学」の用語の選択にはそれほど即効性はない。

〈地理-批評学〉がまず何よりも文学の分析方法の総体を指すため、ある文化の言葉による表現とその文化が自己および他者の空間を知覚する完全な手段のあいだの最初の取り決めの図としてこの語彙を使うことは適切である。だがおそらく、現在日本とヨーロッパ文化、特にイタリア文化にまつわる関係の絆をより良く理解するには、

この語彙をもっと広く、言葉による表現の外側までも、そしてとりわけ文学によって仲介される表現の外にも広げた意味において再考する必要があるだろう。そうすることで「地理-批評学」は、文化人類学用語の言葉、すなわち文化モデル間の交錯の分析となり得るが、場所の具体的な形態論と文化の非実体性のあいだ、つまり知覚された空間と物の見方のあいだの関係のシステムにもなり得る。そしてまさに、批評から今使ったばかりの「物の見方」という語彙へとこの語彙は、ある文化の非物質的特徴を示すのにフランスの年代記作家によって考えられたのだが、まずピサで次にボローニャで、それからチューリッヒで比較文学を教えてきたレーモ・チェゼラーニの開会報告「言語・文化間の衝突から対話へ」は進んでいく。

この報告でチェゼラーニは、アルゼンチンに亡命したベンヴェヌート・テッラチーニの言語学研究を題名においても発表の出だしの省察においても繰り返し取り上げた。つまり、いかに言語の誕生と消滅が文化の誕生と消滅に一致せず、言語が闘争のみならず仲介や知覚の非常に複雑なシステムのあいだの対話の部分をなし得るのかということ。

マーティン・ブーバーが対話の哲学に関する研究で展開したプラトンに言及しながら、チェゼラーニは文化装置を対話のレトリックにおいてのみならず語の物質性を越えたところで調査することにより文化の翻訳可能性を強調した。

このアプローチに繋がるのが、ナポリ東洋大学で日本語・日本文学を教える、大変重要な日本現代作家たちの翻訳者でもあるジョルジョ・アミラーノの報告である。「西欧人のなかの日本」、すなわち「エキゾチズムとエンパシーの途中のイメージ」を話題として、アミラーノは日本文化受容における 50 年代と 60 年代以降の奥の深い変化（禅の発見、禅の「ビートジェネレーション」への影響を、『ティファニーで朝食を』やミッキー・ルーニーの「吃音ピエロ macchiette balbettanti」におけるようなひどい植民地主義的な視線から、グリーンウェイの『枕草子』におけるようなこの上もなく疑い深い病的でもあり背徳的な視線まで、タルコフスキーの最新映画『サクリファイス』あるいはソクーロフの『オリエンタル・エレジー』やドキュメンタリーのように最近発表されかなり成功した例まで）における文化的精神的背景の特徴を明らかにした。文化の翻訳とは、アミラーノにとって、エキゾチズムの偏見に属さない共感をともなった語彙で近づくことを意味する。ロラン・バルトの『記号の帝国』の日本は、いわば大げさな言葉で表現したり習慣に触れたりすることを越えたところで文化というものを再翻訳しようとして部分的に失敗した試みである。それとは逆に、パリーゼの文学的興味は、『雅は冷淡な』の現地報告におけるより『音節文字表』において、ある種の新しい、あるいは再び見出された感もある内面的な基準を取り入れている。いずれも、自分自身を立て直すためや自分の知覚網から身を解き放つために、浸透的で共感的になったりこの共感の性質を用いたりして、限定的な文化の許容量と戯れているようにみえる。

文化の翻訳は鏡のもう片側からも生じる。実際、イタリア文学の教授で東京外国語

大学副学長であり、カルヴィーノ、タブッキ、エーコやその他多数の訳書があり、本会議のオーガナイザーでもある和田忠彦が一個の具体例によって示したように。報告は「浸喰する記憶—イタリアを書くこと訳すこと」と題され、この 20～30 年における日本の最も偉大な女性イタリア研究者であり、翻訳活動や研究の主要な対象のひとつであったナタリア・ギンズブルグと学問を通して接触することによって作家となった須賀敦子の作品と影響が手がかかりとされた。和田によれば、須賀の作品にはいずれも文化と対話をする翻訳者に典型的なあの〈二重の孤独〉という特徴がある。つまり、自己の言語を話し続けながら外国で書くことを欲すれば、ある種の外国移住者の感情、すなわち文化間の交流を試みるたびに伴われる現実への引き戻しのようなものを保ってしまうと。須賀敦子にとってこの危険から抜け出す鍵はおそらく批評活動であった。須賀は 20 世紀イタリア文学を、〈イタリアの記憶〉を再構成するまさに蝶番として、例えばウンガレッティよりサバを好んで認め、フェッリーニあるいはナタリア・ギンズブルグの作品に興味をもったことが証明するように、大胆で規範にとらわれないしばしば私的な評価のプロフィールのうちに見事に描き直した。この集団の記憶という考えを展開させるために、記憶を場の強固な概念にも繋げながら、和田は、最初にヨーロッパの背景を、次に東洋の背景を研究することで地理と精神による知覚のあいだの関係を誰よりも的確に表象した日本の政治理論学者丸山眞男の作品を引用した。

学術的な専門知識の枠に留まらない和田の報告は、ヨーロッパ交換プログラムに専念する日本の若き研究者たちが招かれた会議 2 日目の機軸としての役割を果たした。

2 日目は、パリ第 8 大学の博士後期課程に在籍する太田悠介による「大衆のために書く—マルクス主義思想家エティエンヌ・バリバールの知的道程に関する考察」と題する発表から始まった。今日のヨーロッパにおいて大衆のために書くとは何を意味するのか。ヨーロッパにおける状況の最近の変遷から始めて、大衆自らが一握りの未熟なペテン師の支配下に陥る危険を避けるには、大衆の概念をいかに再定義する必要があるのか。これらの質問に答えるために太田はバリバールを参照し、西洋社会に関する自己の読み直しが大衆についてのスピノザ理論とグラムシ以降のヨーロッパのマルクス主義を批判的に述べることに繋がっていることを強調した。

さらに、ヒルデスハイム大学で博士号を取得した若き研究者秋野有紀は、文化社会学のケーススタディを、「フランクフルト・アム・マイン市の 1970 年以降の文化政策における文化的な教育の意図」と題する非常に入念な報告で、文化・博物館・教育の政策が「万人のための文化」という記号のもとに、40 年にわたってキャンペーン、実験、再考の場であったフランクフルトの領域でいかに計画され実施されたかの行程を示すことで説明した。これらのことについて日本の若き研究者秋野は、フランクフルトの例をまず自国の文化の制度および教育法と比較した。比較は任意で行われ、残念ながら言うまでもなく予想にはそぐわなかったが、現代イタリアにおけるのとはかなり異なる

った形で明白な状況を呈した。

一方で、エレナ・チェルヴェッラーティの指導のもとポローニャ大学芸術学研究科博士課程に在学する横田さやかは、「踊る身体と跳ぶ身体—マリア・タリオーニからジャンニーナ・チェンシへ」と題する報告を行い、未来派舞踊の根本的な転換点と、その転換点とヨーロッパの歴史に残るアヴァンギャルドにおける肉体が表象されたイメージとの関係を再構築した。横田の報告では、参考資料と古文書の画像が示され、未来主義の前提条件を覆すほど発展させた女性モデルをまとめるなかで、ふたりの前衛的舞踊家の役割が浮かび上がった。

同様に、文化的モデルの内部からの転倒が、ポローニャ大学で同じく博士課程に在籍する研究者石田聖子の報告「ペレラからトトへ—20世紀イタリア文化における笑いの諸相」において検討された。報告におけるトトはザバッティーニの『善人トト』の、つまりごく最近修復されたデ・シーカの『ミラノの奇跡』の主人公である。物語から映画までの喜劇の形象を日本人の目を通して見たことで、ザバッティーニにおける、すなわち、新たな視覚化がもっとも単純で気楽な問いをもって自らの時代を問いただす第二の戦後の映画文化において、パラッツェスキの遺産を原文に沿って再構成することが可能となった。

さらに映画と文学の相互作用について、ポローニャ大学のイタリア学研究科博士課程在学中の小久保真理江が、チェーザレ・パヴェーゼとパヴェーゼのアメリカ映画の知覚について書いた「光・影・静寂：チェーザレ・パヴェーゼと映画」と題する報告を、作家が自身のアメリカの風景を構築することを根本において可能にさせた特徴のうちに行った。映画への興味はパヴェーゼにおいて文学への興味に先立つ。パヴェーゼのイメージ/物語についての思想は『生きるという仕事』でも示されているように、無声映画のスクリーン上に、バスター・キートンの笑いのない動きから喜劇性まで、パヴェーゼが直感的に潜在的な物語の対象として知覚し、後に『働き疲れて』において自己のものとする、例の不幸な人々の姿のあいだで展開される表象の具体性、客観性の必要性に参照される。

以上の研究者の報告には、東京外国語大学の西谷修、山口裕之、ポローニャ大学のマッテオ・カザーリ、エレナ・チェルヴェッラーティ、ジャコモ・マンゾリ、マウリツィオ・アスカリが討論と注釈を添えた。

会議は最後に、イタリア学研究科図書館に会場を移して、最近ムリーノから出版された『世界で最も愚かな国』—誤解を避けるなら、題名とは異なり、愚かではない国日本について書かれている—の著者で、トレント大学で教鞭をとるクラウディオ・ジュンタが議論に加わって行われた。この本では、パリーゼの足跡、またそれ以上にロラン・バルトや他の非常に著名な西洋の訪問者の足跡から外れたところで、ある客員教授の日本滞在が計画的に語られている。ジュンタは、帰りの便がすでに予約済みの切符を携えて外国に上陸する者は、今日、旅の経験の新たなジャンルに属すると強調

した。そのような旅はいわば表面的な旅であり、そこでは自分の習慣を脱ぎ捨てる必要もなく、訪れる場所にまったく馴染まないことも可能である。従ってそれは、良きにつけ悪きにつけ、さらに批判的で狡猾で、共感することも滞在する国に美辞麗句で惹きつけられることもないと自己をみなすことになるような経験である。このようにジュンタの本において語り手は、現代日本の細密模様のなかで—大生活の制度でしばしば絶望を感じた強迫観念、硬直、嫌悪においても—観察者にすぎない旅行者の文化の限界、すなわち安易で大まかな作法、軽率、徒党根性、イタリア人でありすぎることの精神の閉鎖について考察する。

ジュンタの発言に続き、活発な円卓会談が、特に日本に関する現代人の視線の限界に的を絞って、アミラーノ、マンゾリ、和田などの発言により行われ、文化の相互的知覚の歴史のまとめと、二つの文化および二つの複雑な思考の地理間の差異と対話の手掛かりを、論理的に再構築する機会となった。

(2011年7月 雑誌『トランスポストクロス—文学文化』(ODOYA 出版社)掲載。東京外国語大学翻訳)